



針葉樹會報

通卷 第五十七號

「エ、行きませう」って、その實格別一處に行きたいやうな様子も無かつたが、のこく、後から隨いて來るんですよ。無口な人でこちから話をすれば、返事はするが、自分の方からは、さつぱり話さない。

「何處へ行らつしやるのでですか?」つて聞けば、

「越中の方へ越えたいと思ひます」つて答へるんです。

越中へ! こんな小ちやな男に、果して越中まで行かれるかしらん?

と思ひましたが、併しその態度からして、唯の男ぢやない、隨分山慣れた人だつて事は判りますから、

この人なら、一人で越中へ行くのなんか何でもないだらうとも思へるんですね。何だか氣になるので、後を振返りく歩きましたが、何時も同じやうに、後からついて来ました。

その中に、一寸とした岩小屋のある處で、一休みしましたが、二氏と初對面の條などでした。前三者は他の適當の機會を待つ事とし、茲には我等のベンチヤンと畫伯との初顔合の模様を、畫伯の口から聞く事にしませう。(編者)

それから、此處にある村尾君と初めて會つた話をしませうか。あれは、大正十何年かの夏でしたね、僕が友人と二人で、あの常念の道をボツボツ登つて行つたんです。すると、木蔭に一人の男が休んでゐる。見るさ小さな男、頼り無い位小さな男なんですね

それがこの村尾君だつたのですが、山の中のことと、「一處に行きませんか」つて聲をかけたら、

「此の邊で泊つて行かうと思ひます」つて言ふので、「それぢあ」と言つて別れました。

其の日僕等は常念の小屋まで行つて泊りましたが、翌日は會はなかつた。それで交渉は絶えてしまひましたが、それから妙に村尾君のことが氣になりました。

小さな人だつたが、あれで無事に越中へ出られたか知らん？

だけど、大分山は歩いた男らしいから、きっとあの人なら、

プラリ／＼暢氣な顔で有峰にでも入つたらう

なんて、交るぐの考が頭をかすめましたね。實際、山の中で會つた人つてものは、都會の路傍の人とは、大分違つた或るものがありますが、その中でも、村尾君の事は氣になりました。

それから東京へ歸つて、何かの機會に村尾君に會ひましたね、あの時、越中に越えたつて事でした。會へば話をする。そして風のやうに去つて行くこ、それで屢く交渉がない。その中に、またフトした處で會ふ。會へば舊來の知己で、去れば又沒交渉で、そんな風にして、十何年になりますか。今にからして親しく交つてゐますが、附合つて見ると、一向飾らない、好い人ですよ。

(文責在記者)

× × ×

最後が狂ふ少し前の半藏が、變り行く世の相と、變らぬ惠那山の姿を見て感慨にふける。

舞臺には山の形が出てないが、これを望む人達の様子で馬籠の村から南に三里聳える惠那山が目に浮ぶ様だつた。芝居を見てて山のことばかり考へてゐる様だが、實はその夜私は名古屋に行くので、一日を以て十二日の日曜日には惠那山に登るつもりで居たので、殊にそんな事が氣になつた譯である。

× × ×

十一日の夕方、用事が済んで慌てゝ名古屋驛に行く。小栗君にも會はず、悪かつたがいつも行くと誘ひ出すので、氣がひけて黙つてゐたのだ。

名古屋松坂屋の屋上に金の鰐を見る爲に望遠鏡が備へてあつて若干を支拂つて覗く。五六年前の冬の晴れた日、其の望遠鏡を借りてゲツと北東の方にまはすと雪を被つた惠那山の姿が見える。二一九〇米。見えては立派な山容である。餘りそちらばかり眺めてゐたら、「少しば鰐の方も御覽なされ」と婆さんに云はれた。

七月十日の夜、日比谷公會堂に藤村の「夜明前」の劇を見に行つた。原作は雑誌で所々讀んだ丈けだが、此の時は惠那山を望んでの會話が三度許り出て來た。

參勤交代の廢止でお大名の奥方が歸國する時、半藏の家に休んで「あの山は何ぢや」と仰せられる。「惠那山で御座います。」

その次が半藏の娘お糸が、弟の宗太と綺麗な朝日の惠那山を望む所。

× × ×

中央線に乗つてまだ暮れ切らぬ此の線の景色を珍らしく眺めて七時半中津川に着いて、驛前の旅館に泊る。惠那山は雲で見えないが夕焼が赤くて明日は好い天氣だと云ふ。

× × ×

十二日晴、八時十分尾鳩行バスに乗る。川上まで行く筈のが道路が壊れて、行けない。尾鳩から一時間ばかりして川上。部落の外れに恵那神社。天照大神のエナをお祭りしてあるんだと云ふから話は古い。

× × ×

道は好い。草も木も茂つてゐる。地圖を見て木山の二里や三里何のそのと思ったのが不覺。カン／＼と夏の陽が照りつける。対寒試験ならば自信もある。雨が降れば携帶テントで凌ぎもつく。暑い日に一枚の手拭ハチマキではどうも辛い。それに寒いと思って毛糸のチョッキはあるが水筒の用意はない。十時半、九百米邊りで對東澤と云ふ澤を過ぎてからは、尾根道で水は無い。それに悪いことには道は老樹の下ばかりではなくて、草イキレの所や、焼けて砂ほこりもバツとたつ。

七月の太陽の射かける千筋の火箭は身體の辻嶋に心臓をたぎらせる。舌がねばる。始めは金液還丹^{ゲンタン}々々と繰返しては唾液を飲む。金液とは唾液で丹は丹田、唾液は黄金の如く貴い液ではき捨てないで腹にのみかへすのが修驗道の奥義と云ふ。所がしまひには金液も出なければ汗も流れなくなつた。十二時半中ノ小舎に着く。小舎は潰れてゐる。小舎場ならば水もがなと探しめたが無い。もう嫌になつて一時迄登ることにして千七百米邊りで踵をかへす。

下りは矢張り早い。對東澤に着いた時は思ふさま水を飲んで雲を眺めながらウツ／＼と一時間半ばかりねころんでた。山での晝寝も久し振りだ。

尾鳩發の自動車は六時。ユツクリ時間があつた。

× × ×

兎に角今度の耐熱行で久しく行かなかつた夏山の氣分も充分味はつたし、お天氣運の好いばかりが能でなくて、時には手を翻して雲を呼び雨を降らせる事の出来る境地に達するのが上乗で、又所謂雨男なる人も利用の道はあるものだと云ふ事も悟つた。それから今度九段に行つたら、拂下の水筒を一つ買つて來ようとも思つた。

海の上から サイパン島にて 鷺

處もあらうに針葉樹會報へ「海から」とはナンダ? などとお叱りを受けるかも知れませんが、まあ嘘、偽りの無いところ、お目見得として小生の近況を御一報申し上げやうと思ふ次第なんあります。

僅か三年間——と云つても之が私の一橋生活の全部でしたが一山岳部の人間であつた丈で、斯う、何んと云ふか、なこやかな様いで腹にのみかへすのが修驗道の奥義と云ふ。所がしまひには金なフワ／＼した氣分のする針葉樹會の會員たるの榮譽を擧ふ事の出来た私は、其の喜びも束の間、忽ちにして餘りにも縁の遠い、板子一枚下は地獄と云ふ生活をしなければならなくなつて仕舞ひました。現在私は、横濱丸と云ふ總噸數六千餘噸の巨船? に打ち乗つて、内地と南洋委任統治地、フィリッピンの間を行つたり來たりして居ります。

昨日も今日もそして明日も、波の間に／＼揺られ乍ら山の事で

も書かうとすれば、どう、こぢつけ、ひれくつても、せいぐく小笠原群島には岩登りにいゝ處がありさうとか、ウラカス火山島は海拔何米だとか、思ふ位が關の山。たまく水平線上に浮ぶ美しい雲を眺めて僅に雪の山をしのび、碇泊中、荷役人夫の船側を上下するのを見て、アブザイレシを思ふよすがとする位のものです。フイリッピンはミンダナオ島のダバオ富士とか、雲のある時こそ嬉しかつたが、霽れてみれば平でがつかりしたり、小雨煙る神戸に入港して六甲を眺め、あゝ山に行きたいと思ふ程今の私の境遇は淋しいものです。

まあ愚痴は此の位にして我が南の生命線、南洋を御紹介致しませう。内地に居てこそ南洋と云へば、椰子の木蔭で酋長の娘が腰を振りく、テクく、踊り、何となくロマンチック？な氣持も致しませうが、何んのく、來て見れば左程でもなし南洋島で、そりや椰子もあります腰みのをつけた娘も居ります、月が照れば海は銀色に光りもしますが、決してロマンチックなんてものぢやないそれより信州や、東北の山村で、浴衣に團扇を持つた村の娘の盆踊りの方がどんなに懐しいものか——

今の南洋は餘り内地と變りません。斯う開けて來たのも日本の統治領となつてから的事ださうで、日本人と云ふ奴は何もかも文明の力の下に切り拓かねば氣がすまないらしい。尤も南洋には黒部も無ければ、尾瀬沼もないんで、餘り私には關係は無いんですけど、まあそう云つた人種である事がよく判ります。従つてこちらへ參る人は南洋廳のお役人、關係會社員、海軍の軍人の他は移民が

多く貨物の方は雜貨、門司からは材木、横濱からはセメントなど毎航積んで戴いて居ります、へイ。

イヤ斯んなお話は又にして、南洋の風景でもお傳へしたいんですが、殘念な事に最近此の邊は皆我が生命線でありまして撮影禁止！如何ともする事が出来ないのであります。せめて海の色だけでも述べて見ますと、其の綺麗な事はまあ内地ぢやちよつと見られませんナ。神宮のプールに水を入れたばかりの時の様です。十數米の海底まで見え、其の中に赤や黒、細いのや太いのや色々な魚が楽しそうに泳ぎ廻つてゐます。然し時には恐ろしい鱗も見えますので、暑くて水が綺麗なのに泳ぐ人は餘り見掛けません。兎に角です、約言すれば南洋は平でつまらぬ處です。

× × ×

此の間横濱へ歸へつた時、小谷部君からの手紙で、彼と森川君が荒澤の奥壁を登つた事を知りました。一昨年秋、矢張り小谷部君と一緒に私が荒澤へ入つた時には、威壓される様なあの壁に、唯壓倒されて仕舞つた様な氣がして居ます。無事によくまあやれたもんだ！私は只感嘆して仕舞ひました。少し長い道を歩くと直きに脛が痛くなる今の私、二、三ヶ月で斯んなにも體は違つて來るもののかじら。山の寫眞、山の本を眺め乍ら、而もエンヂンの音を耳にしながら、脾肉の歎にくれてゐる、これが現在の私の境遇です。ゾンメルシーをつけて浮雪を眺めながら雪深い春山を歩く事が、又肩にめり込む様な重荷と深いラッセルにげんなりしながら、日短き冬の山をあえぎく登る事が、私には何時又出

來るのだらう。斯んな風に考へ始めるこ、私は何時も耐えられな
い様な淋しさに襲はれてしまふのです。

大分下らぬ事を書き散らし、貴重な紙面をつぶして仕舞ひまし
が、もう一つつけ加へさせて戴きませう。今私の乗つてゐる船の
私の前任者は宇佐美孝夫氏、宇佐美さんの御令弟ださうです。世
間は餘り廣く無い様です。

(六月十四日)

都心に退く 林俊介

夏だなア。丁度去年の今頃はたつた一人で鹿島槍から唐松へ行
つ居たつけ。雨に降られ霧に巻かれ散々道を間違へた揚句の果、
さうく大黒の邊で雪渓から滑り落ちて、雲降る谷間で着のみ着
の儘、おまけに眼鏡なしで苦しい一夜を明かしたのだつた。それ
から今迄一年。實に長い、何一つ感激に我を忘れる瞬間を一度さ
へ持つたここのないこの一年。苦しいつらいことばかりだつた。
而乍思ひ出となる時には何れも皆忘れ得ぬ印象として生涯私を喜
ばして呉れるものとなるだらう。

剣から薬師そして黒部の岩魚と有峯の廢村の山旅も十數日終始
雨にたゝかれた、それでもまあ良く歩いたもんだ。そしてその次の
南行きも快晴には恵まれたと言ふものゝ例の事故が起きて自分
が心ひそかに抱いてゐた計畫も總て捨て、歸つて來なければな
らなかつた。そして期待してゐた水晶小舎の生活もその爲中止し
なければならぬのだつた。

續いて起つたのが豫科の事件、これ程自分の心を苦しめたもの

はない。これに對して學校の事件は私の自由な活動を全く許して
呉れなかつた。いたづらにひとりでぢりぢりしてゐなければなら
なかつた。言ひたい不満は多かつたけれども、それを言つたそこ
ろでどうにもならないことを知つてゐた、たまに少數乍ら親身に
努力して呉れる人はあつても、他の事情からそれらの人々に迷惑
のかゝつて行くことを知つてゐる私には、何うしても頼む氣は起
つて來なかつた。處分を受けた豫科の人達はそれでもあの遭難と
同じ様な意味でこれも不可抗力によるものとして私をなくさめて
呉れた。

學校の事件も二月の變以後一進一退何時晴れ上るとも分らなか
つたけれども、漸く先月片付いた。併しその結果は私に強い失望
を起させるものがあつた。だがもう言ふまい。學校の問題に關す
る限り總て片付いたことになつたんだから。

今は私は唯部を再び昔の様に、それより以上に平和な、樂しい
打融けた、山友達の集りに還せば良い。總べての苦しみを忘れて
部の發展のために努力して行くべき時が來たんだ。併し——私は
山へ行けない。行つてはいけないのだ。

石神井以來既に五年餘、私も部を目廻ぐるしい程變遷した。そ
して今や部は力強く前進せんとしてゐる。私は知つてゐる。現在
の部員の力でそれがなされるだらうと言ふことを。唯もう少しそ
れに對して正しい自覺を持つて呉れ、ば申し分ない事も。併しこ
れは老婆心だらうと思ふ。

この昇天の勢で發展せんとしてゐる部を、微力の私が、その上

山に入れない私が、如何にして監督し、指導して行く事が出来よう。妥協をすゝめて呉れる方もあつた——部のためでないことを知られてゐるにも不拘。併しそのあつい好意に感謝しつゝ、私は今から私の最善を信する方へ向つてひさりで歩いて行くことにした。都心に退くこにした。

私は山行きをやめはしない。そして又部を忘れはしない。唯その機會が仲々來ないだけだ。私にそつて私の登山の温床である部が忘れられるものか。私は必ず近き将来に諸君と共に山に行ける時が来ると思ふ。私のことを案じて下さる若い部員諸兄、心配しないで呉れ給へ。

(一一、五、五)

山岳部報告(六月)

記録

- (1) マチガ澤—谷川岳—西黒澤(六・六) 小林、岩崎
- (2) 柳澤峠—將監峠—雲取山(六・七—八) 柿原
- (3) 本澤温泉—八ヶ岳連峰—小淵澤(六・九—一) 松浦、新羅
- (4) 丹澤山塊(六・一三—一四) 大塚、日江井
- (5) 入川谷—川苔山(六・一四) 岩崎

日誌

○定期部員集会 六月五日(金)於國立部室

出席部員(本科六名、豫科七名、専門部一名)
代表委員より涸澤合宿の具体的なる説明あり。

- 杉浦教授を圍む會 六月十二日(金)於小平第一集會室
出席者 杉浦徳次郎教授 部員(本科六名、豫科六名)
○定期部員集會 六月十九日(金)於國立部室
出席部員(本科七名、豫科五名、専門部二名)

涸澤合宿中の各バー、テイの編成、ルートの選定等をなし、合宿解散後の計画等も相談した。

○委員會 六月廿二日(月)於國立部室

出席委員(小谷部、小林、森川、望月、原)

本年度の當部の豫算を作成する。

○夏山を語る會 六月廿五日(木)於小平第一集會室

豫科山岳部員の努力にて一般學生の爲の會合を開く。豫科會より豫算をもらつてゐる關係上、かくの如き一般への奉仕は時々行はるべきである。

出席部員(豫科九名、本科より應援五名)

○木村部長を圍む會 六月廿六日(金)於國立部室

出席者 木村惠吉郎教授 部員(本科八名、豫科七名、専門部三名)

久し振りに部長と膝を交へて懇談をなす。

一橋山岳部昭和十年決算報告書

會計委員 小林重吉

○收入

前期繰越金

一橋會補助金

一六〇・七三
三〇・〇〇

本科會補助金	豫科部費	部員費	大學會計補助金
三〇〇〇〇	一二〇〇〇	四三〇〇〇	一〇〇〇〇
三八〇〇〇	四〇〇〇〇	四四三〇二	一二〇〇〇
七・三九	七・三九	四四三〇二	一二〇〇〇
計	計	計	計
豫科	本科	豫科	本科
專門部	專門部	專門部	專門部
雜收入	○支出	○支出	○支出
合	圖器	圖器	圖器
會務	書具	書具	書具
宿登山補助金	費費	費費	費費
日本山岳會費	費費	費費	費費
部室火災保險料	費費	費費	費費
臨時費	費費	費費	費費
故宮川君追悼錄費用	費費	費費	費費
雜費	費費	費費	費費
次期繰越金	費費	費費	費費
合計	一三二・一五	二七・〇〇	三五・九七
	六・七五	六・〇〇	二五・九九
	四・五〇	一〇・〇〇	九七・三四
	四・三〇	九三・一七	四四三・一二
	四四三・一二	四四三・一二	四四三・一二

會計委員

森川眞三郎

夏山補助金

○收入	豫科部費	部員費	本科會補助金
前期繰越金	豫科部費	同追加金	一〇〇〇〇
三〇〇〇〇	一二〇〇〇	四四三〇二	一二〇〇〇
三〇〇〇〇	三〇〇〇〇	三〇〇〇〇	一二〇〇〇
三〇〇〇〇	三〇〇〇〇	三〇〇〇〇	一二〇〇〇
五五	五五	五五	一二〇〇〇
三〇〇〇〇	三〇〇〇〇	三〇〇〇〇	一二〇〇〇
九三・一二	九三・一二	九三・一二	一二〇〇〇
計	計	計	計
豫科	本科	豫科	本科
專門部	專門部	專門部	專門部
○支出	○支出	○支出	○支出
入部金	入部金	入部金	入部金
圖器	圖器	圖器	圖器
書具	書具	書具	書具
費費	費費	費費	費費
其 他	天幕及改良費 ヒツケル四本 寢袋一箇 石油ラデイウス	其 他	天幕及改良費 ヒツケル四本 寢袋一箇 石油ラデイウス
日本山岳會費	日本山岳會費	日本山岳會費	日本山岳會費
部室火災保險料	部室火災保險料	部室火災保險料	部室火災保險料
通信印刷費	通信印刷費	通信印刷費	通信印刷費
修繕費	修繕費	修繕費	修繕費
雜費	雜費	雜費	雜費
合計	八〇・〇〇	六八・〇〇	四一・二・一
	二〇・〇〇	二〇・〇〇	五・〇〇
	四七・五〇	一二・〇〇	九・〇〇
	六・〇〇	六・〇〇	九・〇〇
	四・五〇	二・〇〇	五・〇〇
	二・〇〇	二・〇〇	五・〇〇
	一・二・〇〇	一・二・〇〇	四・〇〇
	二・〇〇	二・〇〇	四・〇〇
	一・五・〇〇	一・五・〇〇	一・〇・〇〇

九三・一二	四〇・〇〇	三〇・〇〇	一〇・〇〇
五五	五五	五五	一二〇〇〇
三〇・〇〇	三〇・〇〇	三〇・〇〇	一二〇〇〇
九・〇〇	九・〇〇	九・〇〇	一二〇〇〇
四・〇〇	四・〇〇	四・〇〇	一二〇〇〇
一・〇・〇〇	一・〇・〇〇	一・〇・〇〇	一二〇〇〇
一・五・〇〇	一・五・〇〇	一・五・〇〇	一二〇〇〇
二・〇・〇〇	二・〇・〇〇	二・〇・〇〇	一二〇〇〇
二・〇・〇〇	二・〇・〇〇	二・〇・〇〇	一二〇〇〇
一・二・〇〇	一・二・〇〇	一・二・〇〇	一二〇〇〇
一・二・〇〇	一・二・〇〇	一・二・〇〇	一二〇〇〇

次期繰越金

合計

八五・一二
四一二・一二

糠高涸澤合宿日誌（一九三六・七）

今夏の合宿は種々の方面より見て相當意義ある経験をしたので詳細に記述して置くつもりですが、八月號に間に合はず爲ほんの概略を報告いたします。

七月八日 荷物運搬整理等の爲小谷部出發

九日 自動車不通の爲小谷部人夫五名を使用し徳本越にて上高地へ荷上げす、先發隊（望月、小林、和田、森川、鷺崎、榎本）出發

十日 先發隊上高地入り

十一日 横尾橋流失せる爲、小谷部、森川前穂を越へて涸澤へ天幕設立の爲行く、よき天幕地を得るが爲なり。後發隊（柿原、森脇、岩崎、原、新羅、松浦、大塚、日江井、齊藤、關根、水田里見、宮城、高橋）出發

十二日 兩名目的を果して歸る。後發隊徳本泊り

十三日 朝雨の爲荷物のみ徳澤迄運搬。後發隊徳澤泊り

十四日 兩隊徳澤にて合流し、廿一名及び人夫二名の大部隊にて涸澤に入る。大天幕、六人用、二人用（倉庫）を設立す

十五日 本日より合宿。奥穂へ十六名、五名残りで整頓をなす

十六日 天候不良の爲グリセード練習

十七日 全員活動（北尾根、ジャンダルム、飛驒尾根、涸澤槍、涸澤岳奥穂等の班を出す）

十八日 全員活動（北尾根、ジャンダルム、飛驒尾根、涸澤槍、涸澤槍

北穂高等の班を出す）林來る

十九日 全員活動（北穂高側稜、北穂涸澤岳、横尾本谷、北尾根瀧谷第五尾根等の班を出す）

廿日 解散、八名涸澤を去る。上高地へ常念へと

廿一日 十名涸澤を去る。糠高縦走、燕方面、烏帽子方面、上高地等へ向け出發。涸澤にのこりし者北尾根第三峯のフェースへ。

廿二日 瀧谷第四尾根

廿三日 潶澤の天幕をひき拂ひ上高地へ下る

涸澤合宿は以上の如く成功をおさめました。詳細は次號あたりにまとめて御報告する豫定です。今後も年に一、二度ばかりる形式の登山を行ふつもりです。

（七・二七 望月記）

定例集會

七月七日 於如水會館

最近歸朝の河相氏を始、日本にある昭和六年組が全部出席したので、雨の天氣豫報は見事に外れて、窓からは七夕のお星様が仰がれた。中川氏が缺席したので、吉澤氏が歡迎の辭を述べ、河相氏からは、濠洲の羊毛に關し、頗る興味あるお話をあつた。例によつてビールを抜き、要ちやんのオデコが眞赤になる。尙、中島嘉一郎氏追悼錄の發行近きにあることが發表された。

會員消息

吉澤一郎君 杉並區荻窪二丁目一番地に轉居